

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アメリカ アーミッシュの結婚式の食 (結婚式の食 : 10人のフィールド・ワーカーによるワールド・レポート 結婚式の食をめぐる風習)

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-03-14<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鈴木, 七美<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10502/00008384">http://hdl.handle.net/10502/00008384</a>                 |



# アメリカ アーミッシュの結婚式の食

鈴木 七美 (すずき ななみ)

1958年生まれ 宮城県出身

国立民族学博物館教授

専門分野 ● 医療人類学・アメリカ文化学

著書 ● 『出産の歴史人類学—産婆世界の解体から自然出産運動へ』、『癒しの歴史人類学—ハーブと水のシンボリズムへ』、『岩波講座 宗教七生命—生老病死の宇宙』(共著)、他



アーミッシュ・ダイニングのデザートのパイとアイスクリーム  
(写真：PPS通信社)



アメリカのペンシルヴェニア州に旅立つときはいつも、なめらかなマッシュポテト、黄色に輝くトウモロコシ、ぴかぴかしたエンドウ豆が大きな皿にこんもり盛りられている。アーミッシュの食卓を思い描く。キリスト教再洗礼派の一

グループであるアーミッシュは、迫害を逃れ、一八世紀以降スイス、ライン川西岸地域などからアメリカに移住した。テレビや電話、自動車、高等教育など現代文明に関し慎重な態度をとり、これらの適用の度合いに従っていくつも

グループに分離してきた。もつとも厳しい規律を守る「オールドオーダー」から自動車を所有し畑でトラクターを使うよりモダンなグループまで、それぞれがライフスタイルを注意深く選びとっている。だがすべてのグループに共通なのは、非暴力主義を貫き、相互扶助を重視していることだ。それらの活動はおいしい食べ物と深く結びついている。男たちが協力して納屋を建ち上げる「バーン・レイジング」でも、女たちがおしゃべりしながら一緒にキルトを仕上げ「キルト・ビー」でも、持ち寄った料理やデザートを楽しむ時間が待っている。

様々な集まりのなかでも皆が協力して盛大に行うのは結婚の宴会だ。結婚は、若者たちが自らの意思で洗礼を受けアーミッシュとして生きてゆくことを選ぶことだからである。アーミッシュの学校教育は八年生までに限定されており、子どもたちは「ワンルーム・スクール」で読み書き算数を習った後、農業や製造業を営む親の手伝いをする。この時期は、子どもたちが将来について熟慮する期間として重視されている。洗礼前の若者たちは、日曜日の夕方に納屋に集まり遅くまで歌いおしゃべりしたり、ときにはアメリカの一般の若者と同様に自動車を運転するような「放蕩」も大目にみられる。

に行われる。アーミツシユの賛美歌集『アウスブント』の歌を伴奏なしで歌い、旧約聖書、聖書外典そして新約聖書から結婚に関わる説教、誓いと教会のリーダーによる証言、祈祷が行われる。装飾品とみなされている指輪の交換は行われない。

近代化の象徴として「弁当箱」を嫌い三度の食事を家族と取ることを重視するアーミツシユにとって、結婚式の宴会は皆が協力して行う大切なイベントだ。二〇〇人もの人々が集まることも珍しくない。準備には丸一日かかるが、隔週日曜日の礼拝とその後の食事を回り持ちで担当するアーミツシユは、慣れた手順でテーブルや椅子のセッティングを行なう。料理や給仕は、花嫁の家族の教会メンバー、友人や親せきが担う。結婚式メニューは決まっています、

ドイツ語圏からやってきたアーミツシユの好物がたっぷり用意される。「ルシユト roosh't」(ペンシルヴェニア・ドイツ語、ローストチキンを細かくしたものとパンの詰め物を混ぜたもの)、マッシュユポテト、グレイビー、エンドウ豆、サワークリーム和えセロリ、サラダ、ドーナツ、幾種ものパイとケーキ、コーヒーなどだ。ハム、コールスローやピクルス、手作り缶詰のフルーツ、クッキーなどが加えられることもある。客もきれいに飾ったケーキ、果物やナッツやキャンディをもってくる。

新郎新婦は居間の皆から見えるところに座り、客たちは交替で食事する。案内係の既婚カップルは、人々が年齢と新郎新婦との関係によって定まる席に着いているか気を配る。この日は夕食も供され

人々は歌い踊って楽しむ。「supper」と呼ばれる夕食のメニューは花嫁と母親が決めるが、昼とは異なる肉料理、イモと野菜で構成され、チキンシチューと手作りのウエハース、揚げたスイートポテト、チーズをからめたマカロニ、エンドウ豆、コールドハム、チーズ、カボチャ、レモン・スポンジケーキ、クッキーなどが一般的である。賑やかな結婚式は、かつて再洗礼派の人々が暮らしていたスイスのベルン州のカルヴァン派農民のものと同通っているとも指摘されている。

結婚して初めての冬に新婚夫婦は毎週末親戚や友人を訪ねる。金曜日の晩に最初の家を訪ね夕食と朝食、二つ目の訪問先で土曜日の昼食(dinner)、三番目の家で夕食、四番目の家に宿泊し日曜日の朝食、そして五番目の場所で

日曜日の昼食を共にするという具合である。新婚夫婦を迎える家族は、なぞなぞ、数を使ったゲームなどを用意しておく。縫物や編み物を一緒にすることもある。行く先々で贈られるプレゼントは実用品がほとんどだ。新婦には皿、鍋やフライパン、保存容器、新郎には、シャベル、ドライバー、手押し車、ランプなどである。

日常生活の多くの時間を、食事を共に愉しみコミュニケーションションして過ごすことが習慣となつているアーミツシユは、子に家を譲って隣接の「おじいさんの家」に住むようになってからも寂しい思いをすることはないとよくいわれる。集まって共同で行う活動は、神の意志とされている相互扶助を実践する基盤としても不可欠だという。